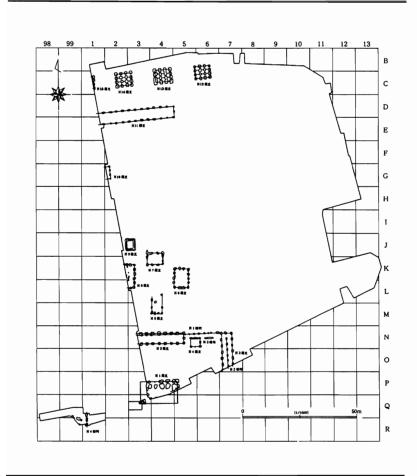
# 第27回 神奈川県遺跡調査·研究発表会 発表要旨



開催日 2003年10月19日(日) 会 場 横浜市開港記念会館

主催 神奈川県考古学会 後援 神奈川県教育委員会 横浜市教育委員会

# 開催要項

開催日 2003年10月19日(日) 会 場 横浜市開港記念会館

〔開会挨拶〕9:40~9:45

えんどうやまざき

〔調 査 発 表〕 9:45~10:10 藤沢市 遠藤山崎遺跡

まんぶくじ

10:10~10:35 川崎市麻生区 万福寺遺跡群No.1遺跡

10:35~11:10 古鶴見湾岸の縄文前期貝塚

11:10~11:35 平塚市 真田・北金目遺跡群

11:35~12:00 川崎市 犬蔵地区遺跡群 元石川-1遺跡

[昼休み] 12:00~13:00

[記念講演] 13:00~14:00 「AMS<sup>14</sup>C年代測定を利用した縄紋時代研究の新展開」

総合研究大学院大学 博士後期課程 小林 謙一 先生

[調 査 発 表] 14:00~14:25 茅ヶ崎市 下寺尾西方A遺跡

いいやま く ぼ

14:25~14:50 厚木市 飯山久保古墳群

〔休 憩〕14:50~15:00

[調 査 発 表] 15:00~15:25 鎌倉市 無量寺跡

15:25~15:50 鎌倉市 五合桝遺跡(仏法寺跡)

10.20~10.00 球启巾 五百/性夏姆(仏伝寺跡)

15:50~16:15 小田原市 史跡小田原城跡 馬屋曲輪

16:15~16:40 近現代考古学の可能性

〔閉会挨拶〕16:40~16:45

〔誌 上 発 表〕 厚木市 神の山古墳

〔図書交換会〕9:30~15:00 横浜市開港記念会館 講堂

表紙:茅ヶ崎市 下寺尾西方A遺跡官衙関連の遺構配置

# 目 次

| 〔記念講演〕総合研究大学院大学 博士後期課程 「AMS <sup>14</sup> C年代測定を利用した縄紋時代研究の新展開」 |  |
|---|--|
| 〔調査発表〕  |  |
| 1. 藤沢市 遠藤山崎遺跡   | 0  |
|   | 9<br>14  |
| 2. 川崎市麻生区 万福寺遺跡群No.1遺跡  |  |
| 3. 古鶴見湾岸の縄文前期貝塚   | 20   |
| 4. 平塚市 真田・北金目遺跡群  | 26   |
| 5. 川崎市 大蔵地区遺跡群 元石川-1遺跡  | 31   |
| 6. 茅ヶ崎市 下寺尾西方A遺跡  | 36   |
| 7. 厚木市 飯山久保古墳群  | 40   |
| 8. 鎌倉市 無量寺跡   | 46   |
| 9. 鎌倉市 五合桝遺跡(仏法寺跡)  | 52   |
| 10. 小田原市 史跡小田原城跡 馬屋曲輪   | 58   |
| 11. 近現代考古学の可能性  | 62   |
| 〔誌上発表〕<br>12. 厚木市 神の山古墳   | 69   |
| 加製果<br>112<br>6<br>相模為  | 東京都<br>3 a<br>3 a<br>1 0 km<br>1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 |

図中番号は上記目次頭の番号に一致

# AMS<sup>14</sup>C 年代測定を利用した縄紋時代研究の新展開 小林謙一 (総合研究大学院大学 博士後期課程)

近年、AMS(Accelerator Mass Spectrometry:加速器質量分析法)を用いた炭素年代による高精度編年の手法が、ハード・ソフト両面から大きな進展を遂げている。AMSでは、測定に必要な炭素量が1mg程度と微量で済み、例えば、従来注目されることの少なかった土器付着の炭化物を利用して、炭素年代を測定できる。日本においても、中村俊夫らによるAMS年代測定が、行われてきた(たとえば辻・中村2001)。国立歴史民俗博物館の今村峯雄を代表とした小林を含む研究グループは、AMS<sup>14</sup>C年代測定による高精度年代測定の研究の一環として、縄紋・弥生時代の年代測定を2001年度より重ねてきた(小林他2002ほか)。我々は、集中的に大量の試料を年代測定することで大きな成果を挙げることを目指している。最近、新聞報道等で話題になった弥生時代の開始年代の研究もその一環である(春成・今村他2003)。

14C年代は14Cの半減期を5568年とし、過去の大気の14C濃度を一定と仮定して、1950年を基点として得られる計算上のモデル年代である。現実には大気の14C濃度は時間的変動があり、また計算に用いる14C半減期5568年は真の値からずれているので、木材の年輪など実年代のわかった資料を用いて14C年代と実年代の対応関係を定め、この標準となる対応関係を基準にして実年代に換算する。これを暦年較正(キャリブレーション)と呼ぶ。90年代以降、較正曲線のデータベースの蓄積と高精度化が進み、過去一万年については高精度の暦年較正が可能となってきた。測定可能資料が幅広くなり、より実年代に近い年代のデータが増すとしても、考古学の側が、その年代のデータを有効に用いるためには、考古学側・分析側両者が、緊密な協業作業の下に資料を選定し、結果を出土状況や土器編年にフィードバックしつつ、得られた測定結果や資料選択の妥当性について検証を重ねる必要がある。縄紋土器の型式ごとに暦年代を対比させる試みは、近年では小田寛貴、山本直人が試みている(山本1999a、小田・山本2001)。山本直人は、炭素年代により貯蔵穴の時間的帰属を求める研究や、集落の継続期間への検討など、優れた研究視点を多く提示している。しかしながら、北陸にほぼ限った研究であり、対象とした土器型式も大別型式で、さらに細かく検討する必要がある。

山本や小田、中村らも指摘していることであるが、微量の土器付着炭化物(お焦げや煤)を測定することによって、直接土器自体の年代(正確には付着炭化物の年代)を測ることが可能となったことは、大きなアドバンテージである。それだけに、土器編年上の位置づけが明確で、汚染の少ない適切な試料をできるだけ数多く選択し、適切に前処理した上で炭素年代測定し、さらに暦年較正を正しく理解した上で実年代を検討しなくては、正しい理解を損なう。日本考古学は、これまで炭素年代測定に積極的ではなかったが、それゆえの精緻な土器編年研究の構築や集落研究が進んでおり、こうした相対的序列と炭素年代測定を組み合わすことで、単なる年代測定に止まらない、大きな成果を望めるであろう。最終的には、型式編年によってすすめられてきた縄紋・弥生時代の年代的枠組みを、列島規模で再構成することが大きな目的となるが、研究資源・時間の有効利用を図る上でも、目的を絞って測定結果の蓄積を目指すことも有効である。そこで、私は、集落の事例と土器編年研究がもっとも進む分野の一つである東日本縄紋時代中期を対象に、細別土器型式ごとの暦年代と、集落・住居の継続期間の復元に焦点を当てて、高精度年代測定を

試みる。

# 1 土器型式の継続期間

文献資料がない縄紋時代では、土器のスタイルの変化に基づいて、土器編年を設定し、その順序で相対的な時間の尺度が定められている。この土器編年に対して年代を数値として与えれば、より具体的な歴史的復元が可能となる。さらに、これまで想像の域を出なかった、それぞれの土器型式の継続期間など、考古学的問題についても検討可能となる。以下に、縄紋時代中期の年代を求め、各土器型式の継続期間を明らかにする研究を行う。東日本縄紋時代の土器に付着しているお焦げ状の炭化物や土器に付着していた漆、竪穴住居の炉や柱穴出土の炭化物、火災住居の炭化材などの試料を2003年8月現在で約1,300点以上を採取し、300点以上の測定を行った。炭素14濃度の測定値から、較正曲線を使って、暦年代を計算した。

測定結果のなかには、予想される年代と300年以上の開きがある年代を示した30数点が含まれる。これらのデータは除外し、さらに縄紋中期に関わる前期末から後期初頭の測定例約150点に限って、編年的位置の不明瞭なデータ(無文の粗製土器など)、同一時期で年代の重複するデータ(同一土器の裏表付着物や再測定・同一遺構出土の土器・炭化材・種子など)を省略し、加曽利E3式期の大橋遺跡や勝坂3式期のSFC遺跡など、特定時期で20数例の測定を集中的に測定した例について図化上込み合うために類似した測定値を適当に端折った上で、図1に炭素14年代の測定値、図2にそれの暦年較正年代を示す。それぞれ、左側に関東・甲信・北陸の中部日本、右側に岩手県・福島県を中心とした南東北地方のデータであるが、関東・中部と東北地方の土器型式同士の、時間的関係をたどることができる。図3は、暦年較正曲線(INTCAL98)と、測定値との関係である。測定値自体でみると、考古学的順番と逆転しているように見える数値は、較正曲線の波行すなわち過去の14Cの大気中濃度における変動を反映している可能性が考えられる。

これらの測定結果を検討し、縄紋時代中期の細かな土器型式ごとの暦年代比定が可能となった。まず、中期初頭の五領ケ台1式・新保1式・大木7a式は、石川県金沢市上安原遺跡(図4a)、神奈川県藤沢市下プ税遺跡、岩手県北上市滝プ沢遺跡などでの測定から、紀元前(cal BC) 3550~3500年頃に、前期末葉の朝日下層式・十三番提式・大木6式の土器群との境が想定でき、中期はじめの年代が判明した(図4b)。同様に、関東地方東京都大橋遺跡などの加曽利E4式~称名寺式・関沢類型土器、及び福島県馬場前遺跡などの大木式土器群の暦年代を検討した結果から、称名寺式土器成立をもって後期とした場合、紀元前(cal BC) 2500~2450年頃に、中期と後期の境が想定できる。勝坂2式(図5・6)や加曽利E2式(図7)など、細別型式における暦年代も、多くの良好な事例の測定例から、整合的に導き出せる。

従来、関東地方の縄紋中期は、おおむね10型式に大きく区別され、さらに各型式が細分されて、もっとも細かく編年されている場合(黒尾和久・小林謙一・中山真治による多摩武蔵野編年、いわゆる新地平編年(黒尾・小林・中山1995))、中期全体で31期の細別時期に区分されていた。大別型式では、1型式が100年程度、細別時期区分では、1時期30数年ごとに、ほぼ等間隔に各土器型式が継続していたと想定されていた。しかし、今回の研究の結果、細別時期ごとに暦年代を推定していくと、20年程度と明らかに短い継続期間の時期と、90年近くは存続が想定される長い継続期間の時期とが認められた(表1)。おおまかにいって、中期前半の五領ケ台式・勝坂1式は土器の文様が早く変化し、中期中頃の勝坂2・3式と後半の加曽利E3式は、土器の変化が緩やかで1時期が長年にわたることが判明した。土器型式でまとめてみても、細線紋の五領ケ台1式期(30年間)、沈線紋の五領ケ台2式期(60年間)、角押紋の狢沢式(60年間)、

三角押文の新道式期(40年間)、キャタピラ紋の勝坂2式期(200年間)、立体装飾の勝坂3式期(180年間)、頸部文様帯を持つ加曽利E1式(90年間)、胴部柱状区画の加曽利E2式(100年間)、磨消区画の加曽利E3式(190年間)、口縁部文様帯を喪失する加曽利E4式(100年間)と推測され、やはり中期中葉と後葉とに、比較的長期にわたる土器型式の継続が想定される。

# 2 集落の暦年代

縄紋中期の研究では、土器編年と暦年較正年代との対比のみならず、直接的に、集落や重複住居出土の 炉体土器や柱材などの可能性がある炭化材、炉内出土炭化物を測定し、集落の継続期間・断続期間や、住 居の改築期間を調べることを試みている。なお、住居内の複数の試料の測定値間に差がないこと(図6)や、 住居内出土炭化材と土器付着物とを測定し、測定年代に齟齬がないことも確認している(図7)。

(神奈川県SFC遺跡の短期的集落の居住期間) 勝坂3a式期を中心とするSFC I 区集落は、3130-3080cal BC の50年間、谷を隔て位置する勝坂3b式期集落のSFC II 区集落は、3010-2930cal BCの80年間の継続が考えられ、土器細別時期では連続する両集落では70年ほどの断絶がある可能性が指摘できる(図8)。

(東京都大橋遺跡の重複住居の住居改築期間) 大橋遺跡における重複住居群の居住の段階(7147)別に年代測定を行った。大橋集落のフェイズ2から8にかけての居住期間は、2760-2650cal BCの間の110年間と推定でき、8回にわたる改築のサイクルの想定から、平均13年間ほどの改築の年代幅が推定できる(図9)。このほか、神奈川県川尻中村遺跡・原東遺跡の縄紋中期集落でも、良好な年代測定結果を得ている。

# 3 今後の展望

住居構築状況や層位的関係など考古学的位置づけが明確で検証可能である遺跡における、型式的にも特定時期の編年的位置づけが明確な土器に伴う炭化物について、数多く集中的に年代測定を行うことで、確率的な暦年較正の幅も絞ることができ、数10年単位の時間幅を検討することが可能となる。

問題点としては、試料としている炭化材の共伴の確実性や、土器付着炭化物の性格について不明な点がある。特に土器付着炭化物では、かなりの数のお焦げが、前処理の際、アルカリ処理によって殆ど溶解する。経験的に言うと、採取した土器付着炭化物のうち、半数程度しか年代測定可能な炭素量が確保できない。遺跡の状況による差も激しく、低湿地遺跡など炭化物の遺存の良好な遺跡と、台地上の遺跡では、炭素試料の回収率は、大きく異なる。また、土器型式によっても傾向は異なり、例えばキャリパー形器形では比較的良好なお焦げを採取できる例が多いが、円筒形器形が多い五領ケ台式などは試料の確保が難しく、また採取してもかなりの土器胎土を混入させてしまう場合が多い。

第一に測定している土器付着物の性格を検討し、何を測っているのか明らかにする必要がある。また、 年代測定の適応性を拡げる(測定例を増やす)ため、前処理でのアルカリ洗浄での炭素の回収率の向上な ど技術的な工夫や、アルカリ溶液中のフミン酸等の成分を測定することの妥当性などの課題がある。

上述したように30数例ほど、予想される年代から大きく外れる場合が認められた。おおまかにいうと、 土器付着物の場合は10%弱、炭化材の場合は10%強、細かい炭化種子では50%ほどの高い確率で、整合的 なデータと比べ200年以上の開きを示す測定値が得られている。このうち、土器付着炭化物の場合は、予想 される年代よりも明らかに古い年代である場合が多く、炭化材の場合では新しい年代であることが多い。 特に、炭化種子等の独立した微細な試料では、近世以降の年代を示すことが多く、遺構出土例であっても、 その遺構に確実に伴うかどうかの認定が難しいことを反映している。また、遺跡によって、かなり整合的 な結果が多い場合と、かなりの試料が整合的ではない場合とが分かれる傾向がある。

土器付着炭化物の場合は、約110試料中で10例ほど、明らかに古い年代が測定された。この場合は試料からの炭素の回収率が低く、土器胎土中の鉱物に含まれる古い炭素が測定結果に影響している可能性がある。 胴部外側付着の炭化物の場合、他の類例と比べて500年以上古い数値が測定される場合があったが、内面付着のお焦げ状の炭化物でも、極端な場合では2万年以上の数値が示された例もあった。煤と認定した中にも、埋没時に土壌中の古い炭化物を付着させた可能性や、お焦げなどの場合にも食料残滓の炭化物以外の物質である可能性(アスファルトなど)が考えられる。  $\delta^{13}$ C値からみて、海洋の古い炭素に由来する(海洋リザーバー効果)と判断されるケースは、神奈川県稲荷山貝塚など海岸部出土土器付着試料中に、 $\delta^{13}$ C値が-20%程度で、他の同一時期試料より数百年古い値を示すような3例ほどがこれに当たる可能性がある。

これまでの研究成果から、測定機関の誤差はあまり大きくなく、試料自体の選択(年代測定に適したサプルを選んでいるか)と、適切な前処理(取り上げ時のバインダー処理された土器など対象とする試料に即した汚染除去、手順を踏んだAAA処理)が最も重要であると、指摘できる。

本研究は、日本学術振興会科学研究費 平成13・14年度基盤研究(A・1)(一般)「縄文時代・弥生時代の高精度年代体系の構築」(課題番号13308009)による研究成果を用いている。試料採取には、平成14・15年度の高梨研究基金の援助を得ている。今村峯雄、坂本稔、西本豊弘、春成秀爾、藤尾慎一郎、設楽博巳、建石徹、植月学、大野尚子の各氏によるご協力・ご教示、多くの資料提供者・機関に謝意を表します。 <参考文献>

小田寛貴・山本直人2001「縄文土器のAMS<sup>14</sup>C年代と較正年代」『考古学と自然科学』第42号 日本文化財科学会 黒尾和久・小林謙一・中山真治1995「多摩丘陵・武蔵野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム 縄文中期集落研究の新地平』

小林謙一・今村峯雄・西本豊弘・坂本稔2002「AMS<sup>14</sup>C年代による縄紋中期土器・集落研究」『日本考古学協会第68回総会研究発表要旨』

小林謙一・今村峯雄2002「向郷遺跡出土試料の炭素年代測定」『立川市埋蔵文化財調査報告12向郷遺跡Ⅵ』

小林謙一・今村峯雄・坂本稔・大野尚子2003「関東地方縄紋集落の暦年較正年代-SFC・大橋・向郷遺跡出土試料の炭素年代測定」『セツルメント研究』4

小林謙一・今村峯雄・西本豊弘・坂本稔2003「AMS<sup>14</sup>C年代による縄紋土器型式の変化の時間幅」『日本考古学協会第 69回総会研究発表要旨』

小林謙一・今村峯雄2003「上安原遺跡出土土器の炭素年代測定」『金沢市上安原遺跡』金沢市埋蔵文化財センター

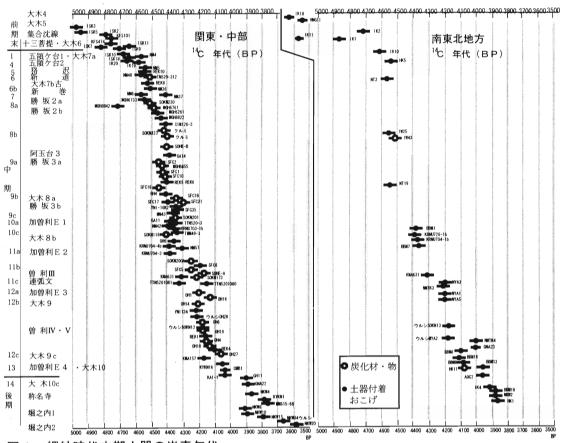
小林謙一・今村峯雄2003「南鍛冶山遺跡下の根地区出土土器の炭素年代測定」『南鍛冶山遺跡発掘調査報告書 - 藤沢市都市計画事業北部第二(二地区)土地区画整理事業に伴う調査 - 第10巻 古代 6・附編』

小林謙一・南久和2003「金沢市上安原遺跡出土土器群の検討」『石川県考古学会誌』第46号

辻誠一郎・中村俊夫2001「縄文時代の高精度編年:三内丸山遺跡の年代測定」『第四紀研究』40(6)

春成秀爾・藤尾慎一郎・今村峯雄・坂本稔2003「弥生時代の開始年代-1℃年代の測定結果について-」『日本考古学協会第69回総会研究発表要旨』

Stuiver, M., et.al. 1998 INTCAL98 Radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. Radiocarbon 40 (3), 1041-1083.





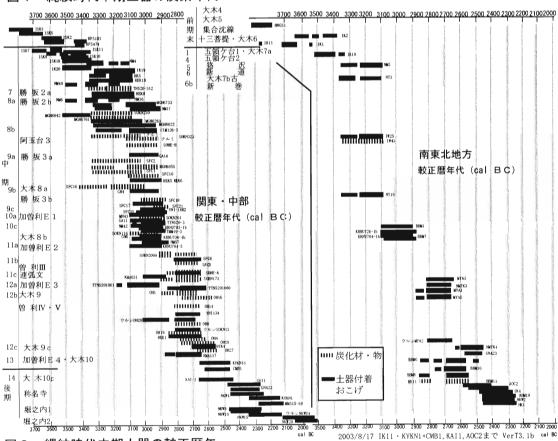


図2 縄紋時代中期土器の較正暦年

太線は含まれる確率の高い部分

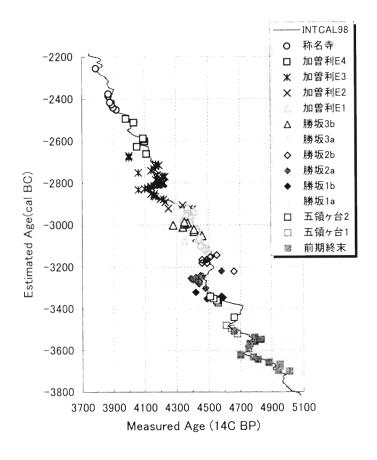


図3 縄紋時代中期の<sup>14</sup>C年代測定値と較正曲線

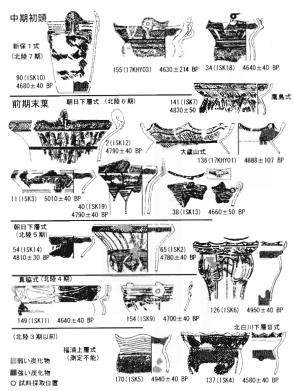


図4a 金沢市上安原遺跡の縄紋前期末葉から 中期初頭の年代測定土器 (1/12)



図4b 前期末葉から中期初頭の暦年較正年代

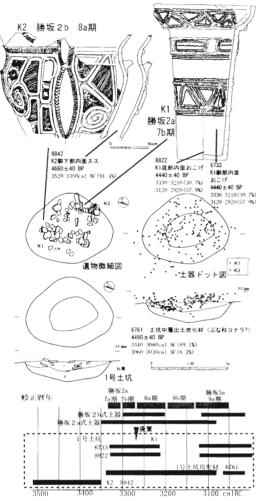


図5 立川市向郷遺跡20次1号土坑

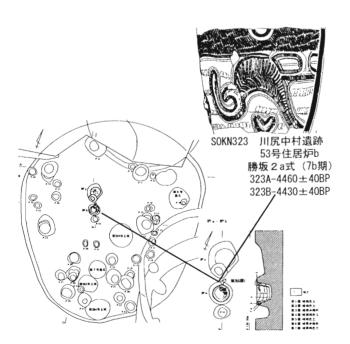


図6 神奈川県川尻中村遺跡の年代測定 炉内出土炭化クルミ殻 2 点の測定

| 土器型式  | 細別時期  | calBC     | 継続期間         | 事例   |
|-------|-------|-----------|--------------|--|
| 十三菩提  | 前期末   | 3650-3520 |              | 上安原・下の根  |
| 五領ケ台1 | 1     | 3520-3490 | 30           |  |
| 五領ケ台2 | 2     | 3490-3470 | 20           | (色の濃い欄は、   |
|       | 3     | 3470-3450 | 20           | 測定数が多く、  |
|       | 4     | 3450-3430 | 20           | 推定の根拠が   |
| 勝坂1   | 5a    | 3430-3410 | 20           | より確からし   |
|       | 5b    | 3410-3390 | 20           | いことを示す)  |
|       | 5c    | 3390-3370 | 20           |  |
|       | 6a    | 3370-3350 | 20           |  |
|       | 6b    | 3350-3330 | 20           | 長峯   |
| 勝坂2   | 7a    | 3330-3300 | 30           | 長峯   |
|       | 716   | 3300-3270 | 80           | 長峯   |
|       | 8a 1  | 3270-3200 | 300          | 向郷20次1土坑   |
|       | 8b    | 3200-3130 | 3            | 川尻中村·原東  |
| 勝坂3   | 9a    | 3130-3050 | :19          | SFC1区集落  |
|       | 96    | 3050-2970 |              | SFC2区集落古   |
|       | 9c    | 2970-2950 |              | SFC2区集落新   |
| 加曽利E1 | 10a   | 2950-2920 | 30           |  |
|       | 10b   | 2920-2890 | 30           | 三矢田10住   |
|       | 10c   | 2890-2860 | 30           | 長峯   |
| 加曽利E2 | 11a   | 2860-2830 | 30           | 川尻中村   |
|       | 11b   | 2830-2800 | 30           |  |
| -     | 11c1  | 2800-2780 | 20           | A STATE OF THE STA |
|       | 11c2  | 2780-2760 | 20           | SFC1区SJ6住  |
| 加曽利E3 | (25)  | 2760-2720 |              | 大橋フェイズ1-2  |
|       | 12b   | 2720-2640 | Santa Carlos | 大橋フェイズ3-6  |
|       | 12c   | 2640-2570 | 0            | 大橋フェイス 7-8   |
| 加曽利E4 | 13a   | 2570-2520 | 50           | 大橋フェイス 9   |
|       | 13b   | 2520-2470 | 50           | 大橋フェイズ10   |
| 称名寺   | 後期14a | 2470-     |              |  |
| 堀之内1  |       | 2340-     |              |  |
|       | 継続期   | 間の色の濃さ    | は推定される       | 期間の長さを表す。  |

表1 縄紋時代中期の細別型式別の暦年代推定

SFC5 炉内炭化材 4230±40BP

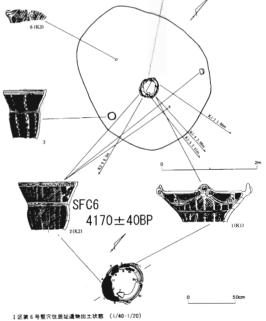
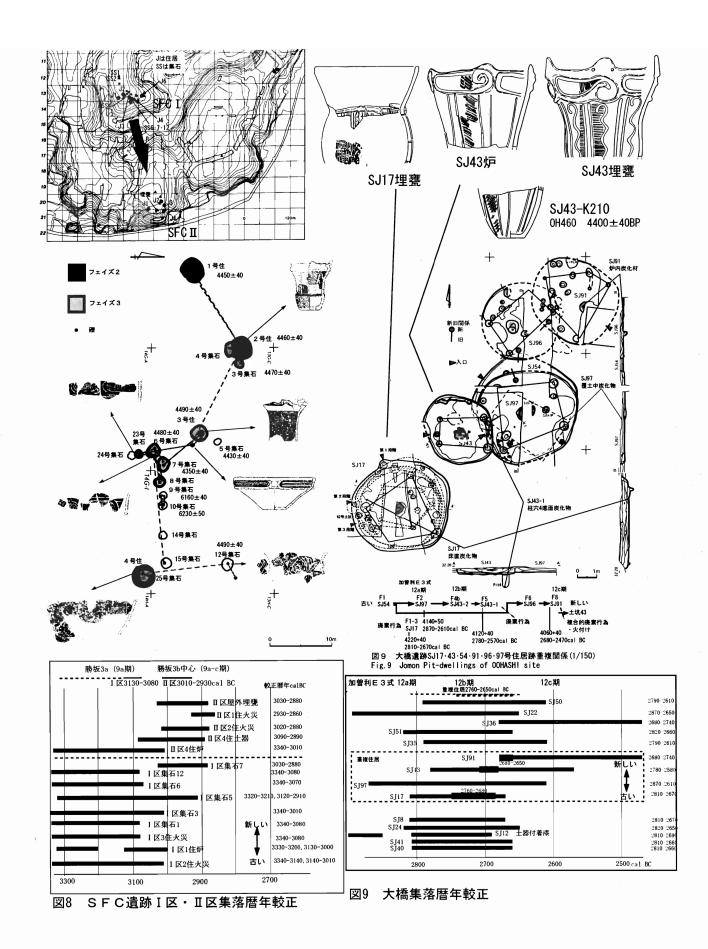


図7 SFC I 区 J6住 (加曽利 E2式期) 火災住居の炭化材と、炉壁土器 付着物の測定



# 藤沢市 遠藤山崎遺跡

# 縄文時代草創期前半に属す遺物群の集中出土

戸田哲也

所 在 地 藤沢市遠藤 3,520 番地ほか

調查機関 遠藤土地改良区内遺跡発掘調査団

(団長 戸田哲也)

調査担当 相原俊夫、小林晴生、中山豊

調査目的 土地改良事業に伴う事前調査

調査期間 1992年10月7日~1994年9月30日

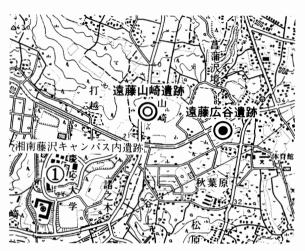
調査面積 4,600 m<sup>2</sup>

# 1. 遺跡の立地

本遺跡は藤沢市No.452 遺跡として登録されているが、遺跡の重要性に鑑み当地区の小字名を付し、遠藤山崎遺跡と呼称する。遺跡は小田急線湘南台駅より西方に約2.5 km離れ、藤沢市北部の高座丘陵に位置する。小出川の上流域にあたり現在川すじは確認できないが旧河川右岸に面する舌状丘陵上に存在する。本遺跡の南西約500mの小出川右岸域には慶応大学湘南キャンパスが広がり、本遺跡と同時代に属す草創期前半に属す遺跡群の存在が知られている。

# 2. 調査経緯

本遺跡は1992年10月より埋蔵文化財の存否確認調査を行い、後期旧石器時代及び縄文時代草創期前半に属する遺物集中部が確認され、1993年1月22日より同年3月31日までの本調査を行った。同時に隣接する遠藤広谷遺跡(藤沢市No.316遺跡)も発見され、1993年5月より1994年9月30日までの期間内に断続的に調査を行った。なお両遺跡の調査については第11回藤沢市遺跡調査発表会(湘南考古学同好会会報No.52)及び第12回藤沢市



第1図 遺跡位置図 (1:25,000)

調査発表会(湘南考古学同好会会報No.56) において調査概要を報告している。その後両遺跡の報告 書作成作業を行い、2003 年 3 月末に遠藤山崎・ 遠藤広谷遺跡発掘調査報告書を刊行した。

## 3. 調査概要

本遺跡は小出川上流の支谷に沿って南北方向に延びる幅約40m、長さ約200mの小さな舌状丘陵の標高29~30mを測る丘陵中央部から東斜面に分布しており、縄文時代草創期前半細隆起線文土器期の遺物集中区3ヶ所と、早期に属す集石址10基、陥し穴5基、炉穴1基が発見された。また標高25mを測る丘陵先端部(南端部)においては後期旧石器時代の石器集中部3ヶ所と礫群2ヶ所が発見された。以下本稿においては草創期前半期の出土遺物について、特に質量ともに充実している1号集中部について報告したい。

本丘陵上には幅約 1.5m~14m、深度約 0.5m~ 1 mを測る大規模な地割れ状の溝が南北に延びる 尾根上を縦走する形で検出された。溝は陥没あるいは断層状を呈しており、地震によるものと考えられる。草創期前半の遺物集中部3ヶ所はいずれもこの地割れ溝が走っており、特に1号、2号集中の中心部はこの溝中に遺存していた。1号集中部の観察から地層は水平堆積のうえ断層状を呈しており、また上部と溝中の石器接合例からも、草創期以降に起こった陥没現象であることが明らかである。

1 号集中は最も大きくかつ遺物の集中した箇所 であり、黒色土層最下部(Ⅲc層)から黒色土と ローム層との漸移層である暗黄褐色土層(N層) に包含されていた。範囲は陥没した断層上面、下 面の両面にまたがり東西幅 15m南北幅 20mの遺 物分布を示す。土器群及び主要石器群の出土範囲 はさらに限定され、一部上段を含むが陥没内を中 心に東西 10m、南北 10mの範囲内より、細隆起線 文土器 6 個体分と帰属不明土器破片類 24 点、大形 木葉形尖頭器 1 点、細身鋸歯縁尖頭器 1 点、中~ 小形木葉形尖頭器 19 点、有舌尖頭器 5 点、石錐 6 点、スクレイパー類 33点、クサビ形石器 33点、 彫器 1 点、打製石斧 3 点及び礫器、敲石、凹石、 磨石、二次加工のある剥片類など大量な遺物が発 見された。土器に対して圧倒的に石器類が多い様 相を示している。なお剥片石器の主要石材は凝灰 岩が 7 割を占め、これに安山岩が続く。

半完形土器を含む細隆起線文土器 5 個体は、それぞれ小範囲にまとまって出土しており、大きく散逸することなく遺存していた。このことから 1 号集中の遺物群はほとんど撹乱を受けること無く原位置を保っているものと考えることが出来、一つの時期の生活跡を想定することが可能となる。

# 4. 出土遺物の特徴と考察

出土した細隆起線文土器は個体Aが半完形品と して復元され、個体B~Dが大破片状態、個体E、 下が小破片であった。文様は貼付細隆起線による 波状文と直線文の二種の組み合わせにより構成される比較的単純な文様となる。直線文は断面三角 形状の鋭角な細隆起線文を作り出しており、波状 文は貼付線の上方から押捺を加える形で小さな凹 みを作り波状風に作出している。

細隆起線は個体Cの幅  $2\sim2.5$  mm、高さ 1 mmと極細のものから、個体Aの幅  $4\sim5$  mm、高さ 2 mmまでの変差はあるが器厚はいずれも平均 6 mm前後と共通している。

文様構成を見ると、個体Aは口縁部波状文+直線文4条、個体Bは口縁部波状文+直線文3条+波状文の表面文様と、口縁裏端部に斜めの刻目文列が施されており、他に類例を見ない文様表徴を示す。個体Cは波状文と直線文により合計8条以上と多条化し、さらに胴下部に横位短細隆起線4条が施されると考えられる。この短細隆起線の存在も注意される特徴といえる。個体Dは直線文と波状文が合計5条以上施されているものと考えられ、多条化の傾向を示している。

出土した土器群は以上のような特徴を持ち、至 近距離に存在している湘南キャンパス遺跡 I 区 I 群土器及びⅢ区 I 群土器と共通するところが多く、 同時期同類土器として捉えることができよう。さ らに微隆起線文手法以前であり、また「ハ」の字 状爪形文出現以前の様相と考えられることから、 花見山遺跡より遡る段階の資料と言えよう。

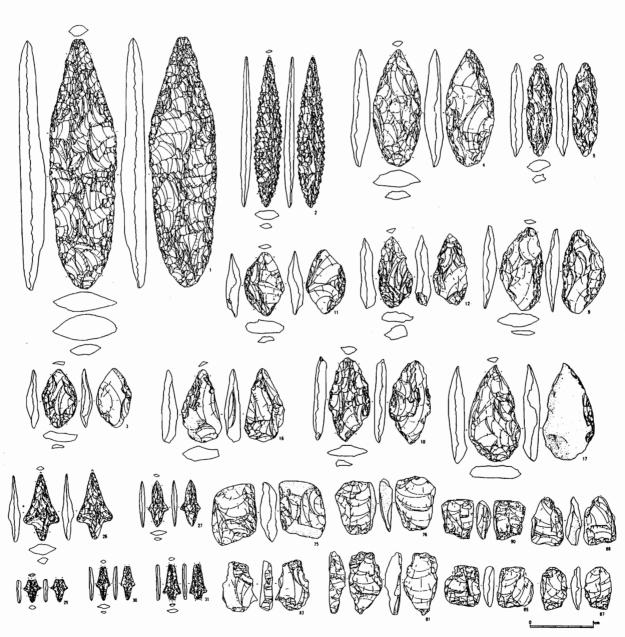
なお個体Bに見られた口縁裏端部への刻目文は、 表裏施文の意識を示しており、東北〜北関東方面 に出現する表裏隆起線文(微隆起線文)土器ある いは口内帯と呼ばれる文様特徴等との発生に関わ る関連性を内包している。

出土石器群の主体は1号集中に見られ、剥片類を含み集中率が高く、器種のバラエティに富んでいることを特徴とする。生活跡でありかつ石器製作場を含んでいる状況が想定されよう。

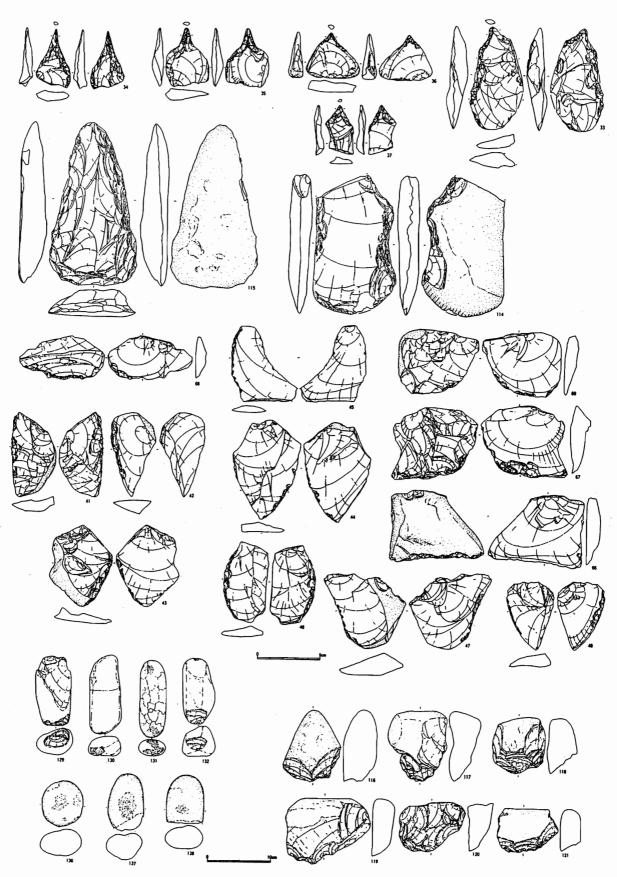
石器組成中に見る珪質頁岩製の大形尖頭器は明らかに移入品と考えられるものであり当該期における人間の移動・接触とモノの移動を如実に示している。薄手剥片の縁辺に加工したスクレイパー類が多出することも特徴的であり、さらにクサビ形石器が多出することも他にあまり例を見ず、木器・骨角器の加工が行われた可能性が高い。

1 号集中に比較的近い状況は隣接する湘南キャンパス遺跡 I 区草創期A遺物集中に見ることがで

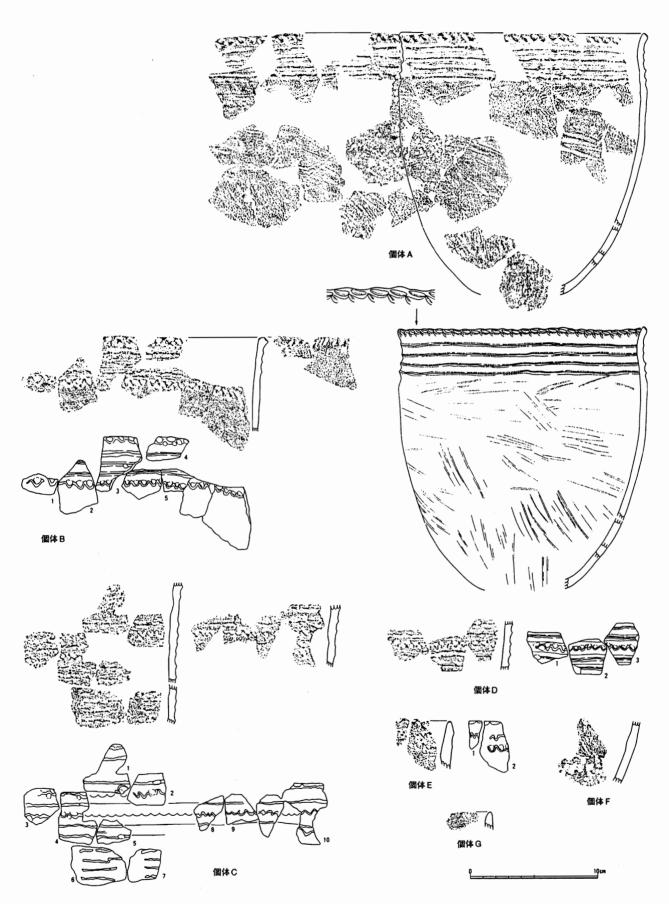
きる。A集中ではバラエティのある器種構成中に 粗製の中~小形尖頭器を含み、かつ中~小形の有 舌尖頭器の形態的類似もあり同時期の石器群と捉 えることが出来る。前述したように土器様相も湘 南キャンパス遺跡 I 区とは近い様相を示し、同時 期生活痕跡の関連を考えることができる。なお石 器群の組成においては多少の変差を持ち、わずか な時間差あるいは各地点における生業上の性格差 等を考慮しなければならないであろう。



第2図 遠藤山崎遺跡1号集中出土石器類 (1)



第3図 遠藤山崎遺跡1号集中出土石器類 (2)



第4図 遠藤山崎遺跡1号集中出土土器群

# 川崎市麻生区 万福寺遺跡群No.1 遺跡

# ― 草創期前半隆起線文期の遺物集中区 ―

北原實徳・今泉克巳

**所 在 地** 川崎市麻生区万福寺字一号 568 番地他

調查機関 有限会社 有明文化財研究所

調査担当 北原實・・今泉克巳

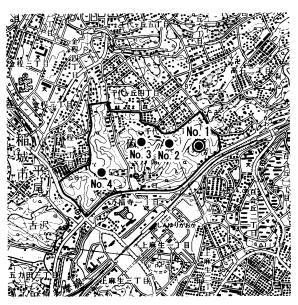
調査目的 土地区画整理事業に伴う事前調査

調査期間 平成13年12月14日~平成14年6月6日

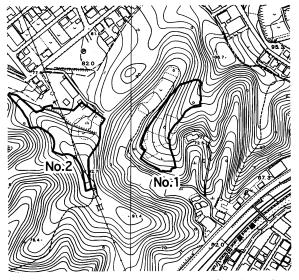
調査面積 約 4,500 m

# 1.遺跡の立地 (第1・2図)

当遺跡群は、小田急小田原線新百合ヶ丘駅の真北、世田谷町田線(県道3号線)に沿った北側の丘陵地に所在する。当該地は、多摩丘陵北東部に位置し、西側約500mを南北方向に流れる鶴見川水系麻生川の支流によって開析された樹枝状の小支谷(標高50~60m)と、平坦面をほとんどもたない痩せ尾根(標高75~105m)が複雑に入り組む地形をなす。遺跡の北側一帯は、鶴見川水系と多摩川水系の分水嶺にあたり、北東約500mに位



第1図 遺跡位置図 (S=1/25,000)

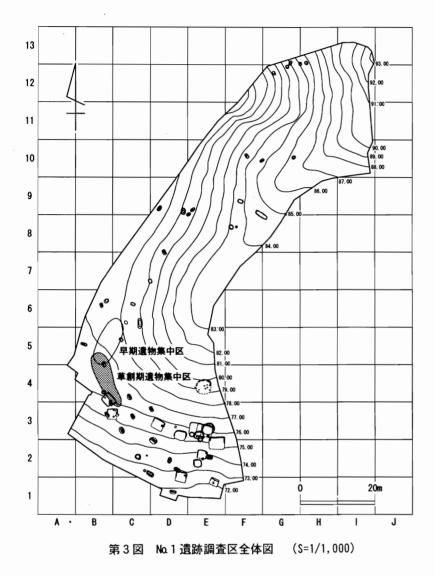


第2図 No.1 遺跡周辺地形図 (S=1/5,000) 置する細山地区には、多摩川水系五反田川の源流 が所在する。

遺跡のある地形面は、標高 80m前後と多摩Ⅱ面 (T2) 的高度を示すものの、地形・地質的特徴などから高位段丘面の多摩Ⅰ面 (T1) に位置付けられている(正岡 1986・増渕 2003 など)。表土は、前期更新世上総層群の泥岩層(柿生層)の上に直接新期ローム層が堆積したもので、一部の地点では泥岩層やその風化土が直接表土となっている個所もみられた。

## 2.調査の経緯

本調査は、土地区画整理事業に伴い実施された発掘調査である。調査対象地は、川崎市教育委員会によって登録された4ヵ所の周知遺跡(百合ヶ丘1~4)で、新百合ヶ丘駅の真北を北西-南東方向に開析する谷戸を挟み西側にNo.4 遺跡、東側にNo.1・2・3 遺跡が東から西に向かって点在し、各々丘陵の尾根頂部から斜面にかけて立地している。



調査は、有限会社有明文化財研究所を調査主体とする万福寺遺跡群発掘調査団(団長 北原實・)が実施した。当遺跡群の調査は、平成12年12月~同13年2月に確認調査を行い、平成13年12月~同14年12月まで本調査を実施した。

# 3.調査の概要

No.1 遺跡 縄文時代草創期・早期の遺物集中区各 1 ヵ所、早期~前期の陥し穴状土坑 27 基、竪穴状落ち込み 7 基、後期の住居跡 1 軒、古代の住居跡 6 軒等。

No.2 遺跡 縄文時代草創期の遺物集中区1ヵ所、 早期の陥し穴状土坑 37 基、中期の住居跡 1 軒、 中世以降の道路状遺構 1 条等。 No.3 遺跡 古代の住居跡 3 軒、 中世の地下式壙 2 基、近世の礎石 建物跡 1 棟、炭焼窯 3 基等。

No.4 遺跡 縄文時代中期の住居 跡1軒、古代の住居跡3軒等。

このように各遺跡からは、様々な時代の遺構・遺物が検出されている。今回は、この内No.1 遺跡から検出された縄文時代草創期前半隆起線文期の遺物集中区について概要を説明する。

# 4. No.1 遺跡の概要(第3図)

No.1 遺跡は、北東-南西方向に 長い痩せ尾根の南端から西側の斜 面一帯に所在する。周囲は北側を 除く三方向を谷戸に囲まれた懸崖 な地形で、谷部は谷頭からの湧水 によって湿地となっている。

調査区は、長さ約130m・幅約 25~40mの細長い形状をなし、標 高は北東の尾根頂部付近がもっ

とも高く93m、南側斜面の下位で72mを測る。調査区の大半は、15°前後の比較的急な斜面地で、草創期・早期の包含層が所在する南西の一角にのみ、平坦面に近い緩斜面が認められる。谷部との比高差は北西部で約3m、南端部で約10m、北東部では20m以上を測る。表土は尾根頂部付近では所々ロームや泥岩層の露呈が見られるものの、斜面下位とくに南側斜面には黒色土が比較的厚く堆積していた。検出された遺構の大半は、この南側斜面に集中しており、それ以外の地点では、西側斜面に陥し穴状土坑が散在する程度であった。

## 5. 草創期遺物集中区 (第4図)

# 土 層

1層(黒褐色土) 泥岩層風化土と黄褐色ソフトロームを斑状に含む。

2 層(暗褐色土〜褐色土) I 層に比べソフト ロームの含有量が多く、色調がやや明るい。

3層(黄褐色土) ローム漸移層に似た濁った ローム質土。

4層(黄褐色土) 3層より暗色のローム質土。 やや大粒の橙色スコリア・赤錆色スコリアを含む。

5 層(黄褐色土) ハードローム質土。橙色スコリアを多量に含む。

6層(褐色土) ハードローム質土。橙色・青灰色スコリアを多量に含み、黄褐色のロームブロックが斑状に混入する。

1・2層は、泥岩層風化土及びロームを斑状に含む不純物の多い土層である。なかでも2層は層厚が地点によって異なり、非常に不安定な堆積状況を示す。また、3層以下のローム質土は、台地上に堆積したロームと比較すると、明度が低く若干濁っており、自然堆積によるロームとは性状が異なるものとみられる。具体的には、自然営力によって移動した再堆積土等の可能性が考えられるが、詳細は現在分析中である。

# 分布・検出状況

草創期遺物集中区は、調査区南西の B-5 グリッド南東~C-3 グリッド北西端部にかけて検出された。該域は先述したように調査区内でもっとも平坦な地点であり、概ねに 5°前後で南西方向になだらかに傾斜していた。

遺物の平面分布は、北西-南東方向に細長く、 長さ約12m・幅約2~5mの範囲に帯状に集中して いた。垂直分布は、標高75.7~76.7mの約1mの 範囲に収まり、75.9~76.5mに集中し、厚さ40 cm程で地形に沿って傾斜していた。出土層位は3 層~5層で、もっとも遺物が集中していたB-4グ リッドにおいて、一部6層上面に及んでいた。

また、当集中区の北側 (B-5 グリッド南東~C-6 グリッド南西) には、早期撚糸文系土器 (夏島~稲荷台式)を主体とする遺物集中区が検出された。平面分布は、北東-南西方向に細長く、長さ約14 m・幅約3~5mを測る。垂直分布は、概ね標高76.6 ~78.1mの約1.5mの範囲に収まり、出土層位は1 層~3 層上位である。

両者の遺物分布範囲は、B-5 グリッドの南東部 において東西・南北約 5mに亘って上下に重複し、 3 層上位では、部分的に両者が混在して出土した。 しかしながら、出土遺物には概ね 30~40 cmの高低 差が認められた。

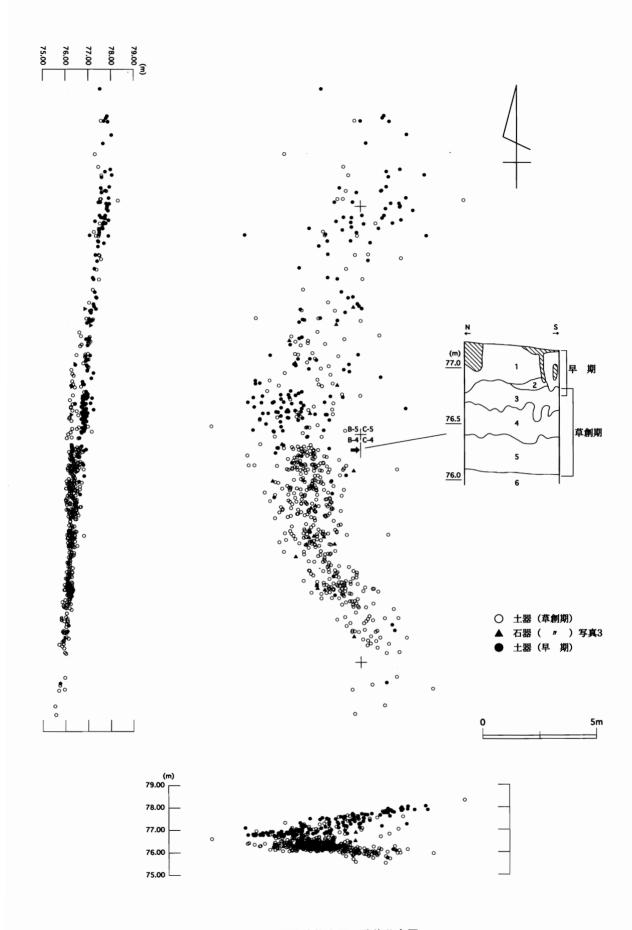
## 出土遺物

出土遺物は、隆起線文土器約 750 点、石器・剥 片類 3,000 点弱、礫約 150 点、粘土塊 25 点の計約 3,900 点である。

土器(写真1・2) 隆起線文土器は、文様の特徴・胎土・色調・焼成等をもとに接合・識別作業を行った結果、20個体前後が確認された。個体毎の破片数は、1~100片前後とばらつきがあるものの、復元実測可能な土器も多い好資料である。

器形は、すべて平縁を呈し、大半は口径と器高がほぼ等しい鉢形と推定されるが、下半部の遺存率が低いため、判然としない部分も残る。大きさは、口径 6.8~21.3 cmを測り、17~19 cmの中形品がもっとも多い。この他に 20 cm以上の大形品、10 cm以下小形品等が認められる。器厚は、もっとも薄い小形品が 3mm、その他も 5~8mm と薄手のつくりである。

形状は、口辺部は直立するものとやや外反ぎみに開くものに大別される。口唇部の断面形は、丸ないし平坦状を呈し、小形品には端部が面取り状に整形され方形を呈するものもある。口唇部は、外側に刻目が施されるものと施されないもの、指先で摘まれ小波状をなすもの等が認められる。胴



第4回 草創期・早期遺物集中区 遺物分布図

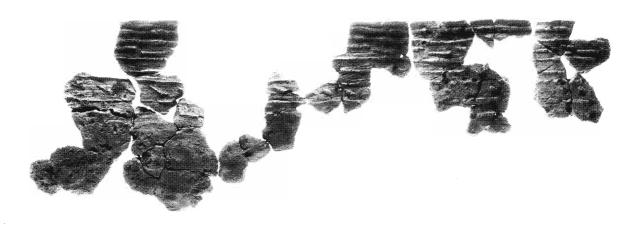


写真 1 草創期遺物集中区出土土器 (横位の隆起線+短隆起線)

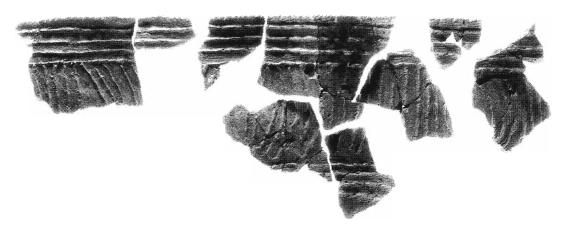


写真 2 草創期遺物集中区出土土器 (横位+縦位の隆起線)

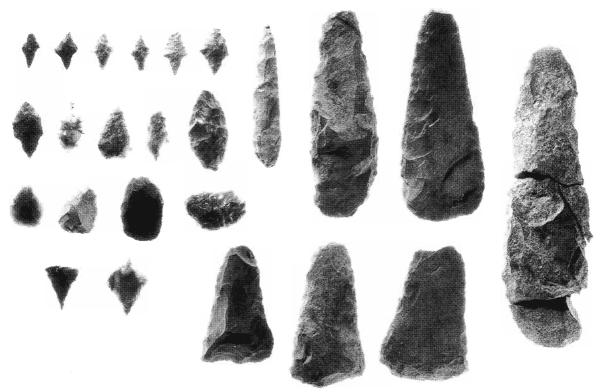


写真 3 草創期遺物集中区出土石器

部は、中央が緩く膨らむものと直線的に窄まるものがある。底部は、出土数がごく僅かなため判然としないが、出土資料はすべて手捏ねにより成形された緩やかな丸底状であった。なお、隣接するNo.2 遺跡では乳房状突起をもつ底部が1点のみ出土している。

成形は、基本的に3cm前後の粘土帯を横方向に 積み上げてつくられており、上段の粘土帯を下段 の内側に重ねて貼り合わせる手法も一部に認められる。折損部に粘土帯の接合痕を明瞭に残す個体 も多い。小形品には手捏ねによるものもある。器 面は、横ないし斜め方向にナデ整形が施され、無 文土器・隆起線文土器の無文部には、縦あるいは 斜め方向の条痕を有する個体も認められる。胎土 は、いずれも細砂粒を多く含み、例外として混入 物がほとんどみられない小形品が1点ある。焼成 は全般的に良好で硬く焼き上がったものが多い。 また、破損後に二次焼成を受けた破片が多いこと も特徴的である。

これらの土器は、隆起線の有無・施文方向から ①横位の隆起線が施される土器、②横位と縦位の 隆起線が施される土器、③隆起線が施されない土 器の3種類に大別される。

①は、口辺部~胴部上半に3~5条の隆起線が口縁と平行にほぼ等間隔に施され、全周するものである。隆起線の間隔は広いもの(15~20mm)と、狭いもの(6 mm前後)があり、前者には隆起線間に短隆起線による貼付文が施された個体もある。

②は、口辺部と胴部中央付近に①と同様の隆起線が施され、その間に縦位の隆起線が垂下するものである。縦位の隆起線には、直線・波状線・弧状線の3種があり、その間に横位の短隆起線が梯子状に施されたものもある。

①②の隆起線はすべて貼付けによるもので、口 縁部→胴部の順に一条ずつ施文されている。断面 形は端部が細く尖った三角形を呈し、その上に微 細な刻目が施されるものもある。隆起線は幅 1~5mm・高さ 1mm 前後を測り、幅は 2mm 程度のものがもっとも多い。

③は、口唇端部の外側を指先で小波状に整形したもの、粘土紐を貼付け隆起線状に尖らせたもの、口唇部が丸くすべて無文のもの等があり、大形品は認められなかった。

石器(写真3) 尖頭器21点、石錐3点、掻器・削器13点、打製石斧6点・加工痕を有する剥片54点等が出土した。使用される石材は、チャート・頁岩類がもっとも多い。

尖頭器は、いわゆる花見山型と呼ばれる小形の有舌尖頭器(長さ2.3~3.7cm)が半数以上を占め、この他に木葉形・柳葉形尖頭器が出土した。後者は、分布の最下位(6層上位)から1点のみ出土したものである。打製石斧は、片面調整の薄型品と箆状を呈する小形品の他、長さ18.6cmを測る大形品が1点のみ出土した。石鏃は1点も出土しなかった。

#### 6. まとめ

万福寺遺跡群の所在する多摩丘陵は、縄文時代草創期の遺跡がやや集中し、周辺には黒川東・栗木IV・駒沢学園校地内・広福寺境内の各遺跡が知られている。また、北西の多摩ニュータウン内には、No.426・116 遺跡等、さらに南の鶴見川流域には花見山・月出松・なすな原遺跡等が所在する。

当遺跡の隆起線文土器は、これらの遺跡の土器と類似する点も認められるが、異なった特徴を有するものが主体を占めている。これは、南関東の隆起線文期の新たな要素を示すものと言え、この時期の土器編年の再考をせまる重要な資料と考えられる。同じく伴出した石器も、当該期の組成を示す好資料と言えよう。

# 古鶴見湾岸の縄文前期貝塚

# ― 横浜市茅ヶ崎・西ノ谷貝塚の調査成果 ―

坂本 彰

# 1. 港北ニュータウン遺跡群の調査

港北ニュータウン計画は横浜市北部の旧緑区東部・港北区西部の範囲に、人口30万の都市を新設するものである。この地域は下末吉台地の西端に位置し、畑・雑木林・水田などの近郊農村地帯であった。1950年代の『横浜市史』作成に際して南堀貝塚・市ヶ尾横穴群が調査され、かつ分布踏査により"遺跡の宝庫"として知られるに至った。

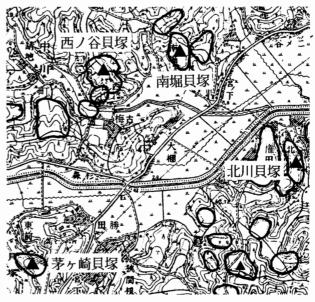
1970年には港北ニュータウン埋蔵文化財調査団(岡本 勇団長)が結成され、以後20年間にわたって旧石器時代〜近代の268遺跡を調査した。地域を代表する弥生時代の環濠集落址の大塚・歳勝土遺跡は国史跡に指定され、横浜市歴史博物館が建設された。港北ニュータウンは旧地名にもとづき、「都筑区」となった。発掘調査の整理報告は(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターで実施し、これまでに報告書34冊を刊行した。

# 2. 茅ヶ崎・西ノ谷貝塚の調査(第1図)

鶴見川下流域は縄文海進にともなって「古鶴見湾」が形成され、周辺に成立した貝塚 20 数か所のうち、早渕川流域の5貝塚が調査の対象となった。

最も上流の境田貝塚は試掘で諸磯 a 期の貝層が確認され、都筑中央公園の東部に保存されている。南堀貝塚は黒浜~諸磯 a 期の住居址 14 軒と墓坑約 320 基が知られ、集落全体の様相が把握された。北川貝塚は第三京浜道路で半分近くを失っていたが、花積下層・黒浜~諸磯 b 期の住居址 27 軒と墓坑および埋葬人骨 1 体が発見された。住居内貝層や平地貝層多数も確認され、他の貝塚とやや様相を異にする。なお境田貝塚上流の京塚遺跡にも、土坑内小貝層がみとめられた。

茅ヶ崎貝塚の調査は小宮恒雄氏が担当し、1987



第1図 早渕川流域の縄文前期貝塚

年8月~88年7月に行なわれた。遺跡中央部は土取りされていたが、縄文・古墳・平安時代の集落と判明し、黒浜~五領ヶ台期の住居 27 軒と墓坑85基があった。斜面貝層2か所のうち、北貝層は忍沢成視氏が調査を行ない、西貝層は保存された。

西ノ谷貝塚は1973年4月~1987年7月の間に、 3次にわたり調査した。縄文・古墳・平安時代の 集落があり、黒浜~諸磯b期の住居50軒と墓坑5 基および住居内貝層8か所がみとめられた。貝層 の調査は小池裕子・中村若枝・忍沢成視氏によっ て実施され、動物遺存体・貝層の形成期間・形成 過程など、住居内貝塚の基準となる成果をえた。

# 3. 茅ヶ崎貝塚 (第2~7図)

早渕川中流南岸の標高 38mの台地上に位置し、前期集落は中央部に墓坑群が、その周囲に住居群がある。黒浜期は東側に3軒が並び、2時期とみられる。諸磯 a 期は10軒が環状に分布し、台地先端のJ23・24号が中心で2時期ある。諸磯 b 期は5軒が南向きの半円状に分布し、不明が5軒ある。

墓坑は円形で数基が1グループをなし、土器・土・石製品が副葬される。十三菩提・五領ヶ台期の住居は小規模で、墓坑は円形で底部欠損の土器が埋納されている。前期中葉~中期初頭の環状集落の典型をなすものといえよう。

西貝層はJ22~24 号の西側斜面上部に形成され、幅 15m・厚さ 50 cmある。時期は黒浜・諸磯 b 期で、貝層上は諸磯 c 期中心の前期包含層となっている。

北貝層はJ25号の北側斜面上部に形成され、幅 15m・厚さ20cmで、大小14のブロックからなり、 貝はハイガイ・マガキ・ヤマトシジミ・オキシジミ・ハマグリが多い。 貝層は5段階にわたって形成され、主体がマガキ・オキシジミ・ヤマトシジミと変化し、異水域の広範な採取活動とみられる。 魚骨は20種あり、マイワシ・スズキ主体でボラ・タイなどの内湾魚と淡水魚ウナギが含まれている。 哺乳類はシカ・イノシシなど、鳥類はカモ・スズメで量は少なく、他にヘビ・カエルがみられる。

住居内貝層はJ22号(諸磯b期)にあり、少量の貝と獣・魚骨が出土した。J8号(諸磯a期) 柱穴内や、住居外ピットにも小貝層がみられた。

# 4. 西ノ谷貝塚 (第8~12図)

早渕川中流北岸の標高 41mの台地上に位置し、 広い平坦面全域に前期集落が分布する。酒詰・竹 下氏が 1936 年に調査報告したイヌ埋葬坑は J 5 号内にあり、骨直下の「表土と区別しかねる有機 土」の存在から、時期はより後世の可能性が高い。

黒浜期の住居は大型のJ39号を中心に10軒が台地南西部で小環状をなし、内部に墓坑をともなう。他は北・東端に分在し、3時期あったとみられる。

諸磯 a 期は 35 軒あり、台地東半部に大規模な環状集落を形成する。東西に位置する大型のJ5・6・36 号が中心で、後に住居内貝層がつくられる。住居は中小の数軒で1群をなし、全体は9~10 群ある。大半は分散的だが、南西の2群は重複が激

しい。円形の墓坑は住居の内側に位置し、玦状耳 飾が副葬される。これまでに知られたこの時期の 集落として、古鶴見湾岸では最も大きい。

住居内貝層は前述の他、J9・11・30・57・59 号にあり、以前2か所存在した。詳細調査は3か所で行ない、J5号の貝類採取は2シーズンにわたると結論された。J30・57号は貝層が完存しており、データ作成上有効な例となった。

貝はJ30号が36種、J57号が31種で、いずれもマガキ・ハイガイ・ハマグリが主体を占めている。J30号中に生息状況をしめす「棒付きカキ」が、J57号ではイボキサゴ・フジツボがある。貝は20回以上の投棄で形成され、J57号では焼貝が目立ち、また柱穴内下部に小貝層がみられた。これは貝層形成初期に住居の柱がまだ残存しており、その後に火を介在した何らかの行為が行なわれたと 想定される。また獣・魚骨はきわめて少なく、住居跡は貝類のみの投棄という意識の存在をもうかがわせる。赤彩フスマガイ・ツノガイ製品もある。

諸磯 b 期は 3 軒のみで、集落は急激に衰退し、 土器のみがやや多く残され、終焉をむかえる。

## 5. 小結

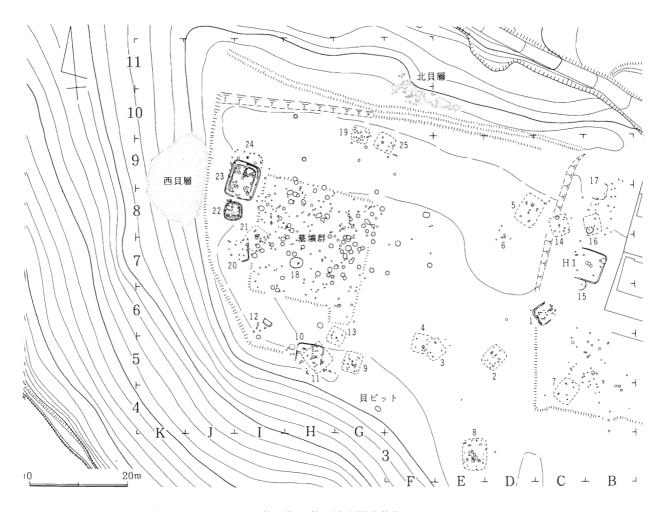
古鶴見湾岸の貝塚は早期末(宮ノ原)に開始され、前期初頭(菊名・北川)にも存在するが、関山期は見当たらない。次の黒浜期になると集落はあるものの、貝層は南堀・茅ヶ崎にすぎない。

茅ヶ崎・西ノ谷貝塚は形成時期こそちがえ、湾 岸貝塚群の最盛期に相当する。今回の調査成果は、 前期集落・貝塚群解明への基準的視点となろう。

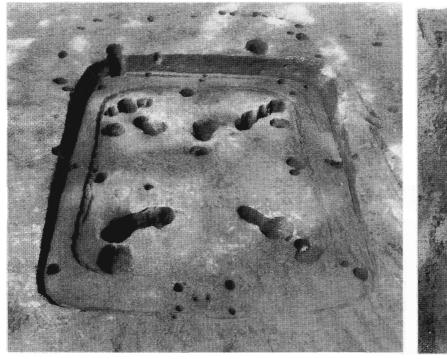
# \*引用文献\*

- ・小宮恒雄編 2001・02『茅ヶ崎貝塚』港北ニュー タウン地域内埋蔵文化財調査報告 28
- ・坂本 彰他 2003 『西ノ谷貝塚』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告33

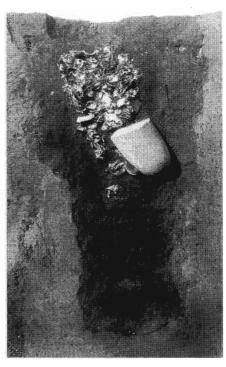
[いずれも、(財)横浜市ふるさと歴史財団刊]



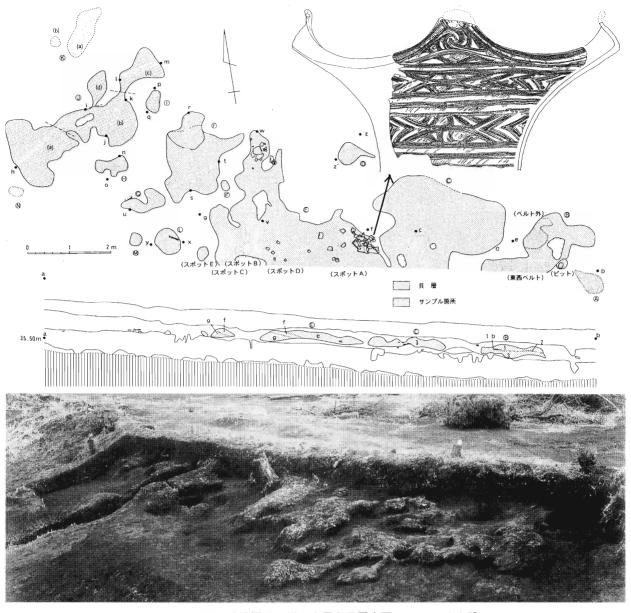
第2図 茅ヶ崎貝塚全体図



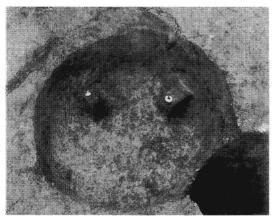
第3図 同J23·24号住居址



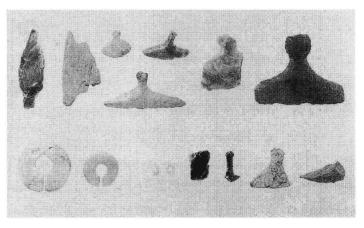
第4図 同J8号住居址柱穴内貝層



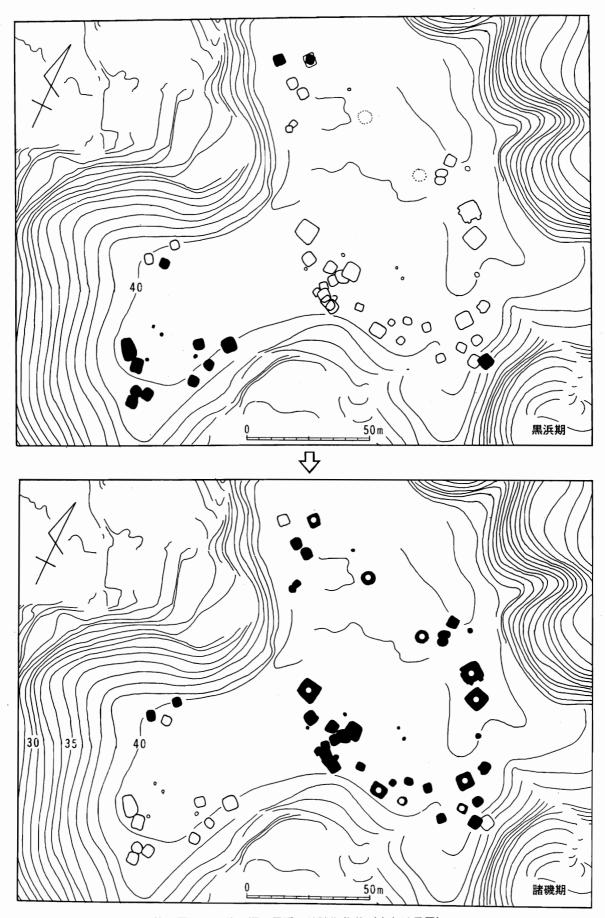
第5図 茅ヶ崎貝塚北貝層の全景と貝層上面の 諸磯 b 式土器



第6図 同石ヒと玦状耳飾を副葬した墓坑



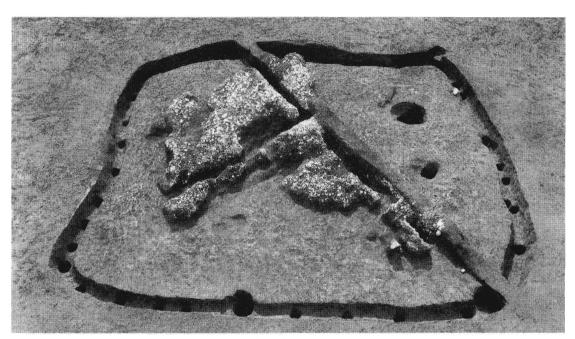
第7図 同墓坑に副葬された石製品



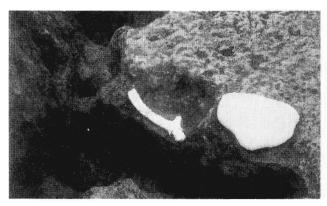
第8図 西ノ谷貝塚の黒浜・諸磯期集落(白丸は貝層)



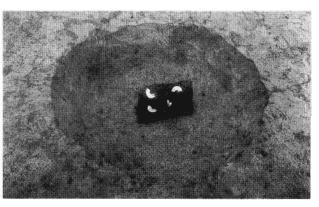
第9図 西ノ谷貝塚 J 5号住居址 (右上貝層中の坑が1936年調査地点)



第10図 同詳細調査を行った J 57 号住居址内貝層



第11図 同J36号住居址床面のシカ角と台石



第12図 同玦状耳飾を副葬した墓坑

# 平塚市 真田・北金昌遺跡群

# - 縄文時代後期の水場遺構 -

上原正人

所 在 地 平塚市真田・北金目

調査機関 平塚市真田・北金目遺跡調査会

調査担当 若林勝司・上原正人・川端清倫・中嶋

由紀子

調査目的 土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発

掘調査

調査期間 1995年9月6日~現在継続中

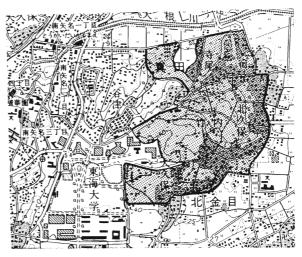
調査面積 約179,800 m (2003年3月まで)

# 1. 立地と環境

本遺跡は平塚市の北西部、秦野市との市界周辺に位置する。源を丹沢山地に発する金目川によって南側を、大根川により北を隔てられた北金目台地の東端にあたる。この台地は標高 45~30mほどを計り、西から東へ緩やかに高さを減じて行く。その先は金目・相模両河川の氾濫原を経て、相模湾が形成した砂州・砂丘域へと続いている。

平塚市遺跡分布地図には真田・北金目遺跡群内に城郭、集落、古墳等の9遺跡が載せられており、時代は旧石器時代から中世・近世までを含んでいる。今回紹介する地点は、本遺跡群の西端に位置する入谷戸遺跡(NO.238)(註1)で、王子ノ台遺跡(NO.236)と北および西に接する。台地上面との比高差10mの「V」字状侵食谷の底および中腹に遺構を形成していた。

本遺跡群内では縄文時代中期後半以降の集落は 少ない。水田面に近い標高 26m程の台地南端にお いて竪穴住居址を 1 軒調査しているだけで、現在 のところ集落址は検出していない。谷の西方は王 子ノ台遺跡であり縄文中期後半から後期中葉の集



第1図 遺跡位置図(1/25,000)

落が存在している。本水場遺構はこの集落の生活 圏に含まれる。王子ノ台遺跡の北西に隣接する真 田大原遺跡(NO.21)では中期の集落址や後期の配 石遺構を検出している。もう少し範囲を広げれば、 中期から後期の遺跡では、伊勢原台地の上ノ入遺 跡(NO.18)、大磯丘陵上の原口遺跡(NO.109)で まとまった集落址を検出している。

# 2. 調査経緯

遺跡群の総称は、「真田・北金目遺跡群」としている。その中の各調査箇所は調査順や地点によって「区」と細分し番号を冠してある。また、英字で枝番号を付けている区もある。

縄文時代後期の水場遺構を検出したのは15区である。枝番号はAからEで、A・B区は平成10年5月6日から同年9月14日まで、C区は平成11年4月6日から7月16日まで調査している。いずれの地点も谷戸および谷戸から立ち上がる南向き斜面の調査である。この3地点からは遺構外

ではあるが、堀之内式土器を主体とした中期後半から後期中葉の土器と石器とを少量出土している。

15D区は平成 11年 11月 30日から翌年 2月 18日まで調査した。溝状の落ち込みと後期土器の「土器溜まり」、谷下層の縄文時代中期~後期に亘る遺物包含層を調査している。(註2)

今回紹介する15E区は平成14年1月22日から9月20日にかけて調査した。谷上面の中近世、奈良・平安、古墳前期の遺構を調査し、次に15D区からの縄文遺物包含層の広がりを確認するためにさらに掘り下げた。結果、遺物が出土し水場遺構を検出した。この間の無遺物層の厚さは5m以上あった。調査面積は1,100㎡である。

# 3. 調査概要

水場遺構は、谷底に沿って形成された礫敷きと、 谷斜面および礫敷き下に検出した土坑の2つの形態から成る。また、遺構は重複関係にあるものは時期差を捉えることができた。

# 礫敷き水場遺構

谷は南から鉤の手状に北へ廻りこんで北東へ流れ出ている。この谷底に礫敷きを検出した。層位によって新旧に分けることができた。

上面にある新しい時期の礫敷きは上流部と中流部、下流部で覆土、礫の状態、遺物の質・量に差が見られた。上流部(SC1001)(註3)は南から北へ下がる部分で長径8.6m、短径4.1mの範囲にある。覆土は厚さ30cm以上の粘土層(ローム層)によってパックされていた。この土層は地すべりと考える。礫の大きさは、拳大から人頭大のものまでさまざまで、礫と土器が無造作に詰め込まれた状態であった。廃棄状態である。下層には比較的大型の礫が多くみられたが、堰等の遺構の構造を復元することはできなかった。土器は多く、堀之内2式を主体とし、加曽利B1式までの土器を含んでいる。

鉤の手部分の中流部(S X 1 0 0 4)は、径 150mm 大の比較的大きな礫が乱雑に転がる点で、上流部の下層に近い様相を呈する。礫敷きの幅は一定せず 1.5~2.0mとさまざまである。礫敷き脇や下に検出した円形土坑の存在に注目すると、この土坑が廃棄され、崩れた状態を示していると考えられる。比高差があり礫が流出しやすかったためとも考えられる。同じ理由で覆土の泥炭層も薄く、堅果類の出土が少ない。

下流部(SX1004)は直線的に北東へ向かう部分であるが、上半4mほどは中流部と同じで礫が大きい。礫敷き下の土坑が崩れた状態と考える。覆土の泥炭層は厚くトチノキ種子が目立つ。

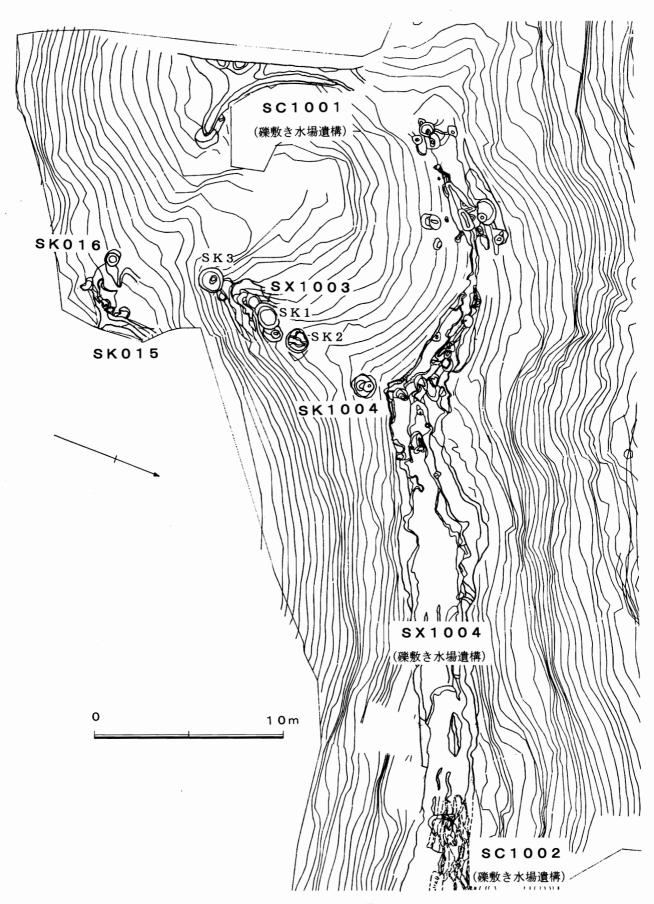
下半はさらに泥炭層が厚くなり、有機遺物が増加する。礫が全体に細かくなり割れたものが目立つようになる。同時に礫敷きの幅も左右の壁を削り込むなどして 3.0m前後で一定にし、礫上面も平坦に整えている。この部分は礫敷きの通路や作業場と考えたい。この周辺から礫下の掘り方が岩盤ではなくなり、褐色土となる。さらに下には次に説明する礫敷きが存在する。

下層の礫敷き (SC1002) は、深く細く侵食された幅 0.5~1.0mほどの岩盤内に礫が流れ込んだものである。礫の状態は中流部に類似する。調査範囲内では堰などの構造は無かったが、泥炭の覆土の存在から滞水していたと考えられる。

時期は、下層の礫敷きが中期後半から堀之内1 式期までの広い範囲で捉えられ、上層は堀之内2 式から加曽利B1式期と考える。

## 土坑水場遺構

土坑は中・下流で検出した礫敷き下の土坑のほかに、南側斜面の折れ目に沿って4基の土坑が一列に配置されている遺構がある。掘り込みの大きさは、上から1.3×1.25m(SX1003SK3)、2.0×1.0m(同SK1)、1.22×1.15m(同SK2)、1.28×1.21m(SK014)で、深さは各



第2図 遺構配置図

約1.0m程度である。

土坑内には礫と土器が詰められていた。貯蔵穴の形態を有するが、谷斜面の折れ目により導水された、上から下まで流れ落ちる「あく抜き・水さらし」のための施設と考えたい。上位の3基については土坑上の広い範囲にかぶって土器が厚く堆積しており、廃棄の時期は同時期であると推定できた。ただし、4つが同時期に機能していたかどうかは考古学的には?みきれなかった。廃棄された土器は堀之内1・2式を主体とする。

## 出土遺物

土器以外では上面の礫敷きから、円筒土偶の顔 面部2点、土製耳飾、円盤状土製品を検出した。

石器類は、目立ったところでは石錘が最も点数が多く完存品もあるが、ほとんどが破損していた。 単に「礫」として認識されていたと考える。

動物遺体は、魚類ではベラ科咽頭骨、哺乳類ではイヌ、イノシシの骨や歯、鹿角が出土した。この中のイノシシ左尺骨(前あし)は破損形態から刺突骨角器である可能性もある。(註4)

植物遺体のうち堅果類では、カヤ、イヌガヤ、オニグルミ、トチノキ、クリを検出している。上層の礫敷き覆土からは多量のトチノキ種子を出土しているが、果実や幼果も多く、上流にトチノキが存在した可能性も考えられる。クリ果実は下層礫敷き覆土からまとまって出土している。

#### 古環境

礫敷き中流部の覆土で花粉分析を行っている。 結果は、照葉樹のアカガシ亜種を主体とし、落葉 広葉樹のコナラ亜属やトチノキ属、サワクルミ属 ークルミ属、ハンノキ属、カエデ属、針葉樹では スギ、ヒノキ類もみられた。最下部ではトチノキ 属がやや多い。草木類ではイネ科、ヨモギ族を得 ている。(註5)

花粉採取地点より約 10m上流の15D区の樹種同定では、針葉樹のカヤ、広葉樹のアサダ、コ

ナラ節、ケヤキが認められている。(註2)

石器を除く礫の多くは、丹沢山地を起源とする 凝灰岩・火成岩が90%、箱根火山の古期外輪山溶 岩(根府川石)が10%程度と大きく二分される。 丹沢山地起源の礫については、大きさ・丸さ・種 類から南に約1km 離れた金目川に由来するもの と考えられる。(註6)

# 4. まとめ

水場が王子ノ台の集落(註7)の生活圏に包括 されることは間違いない。水場遺構が、至近にあ る集落にどのような影響を与えたのか興味深い。

水場の用途については、作業場やアク抜き・水 さらしと推定したが、さらに多くの類例を待ちたい。また、今回検出した水場遺構は遺構の構造そ のものではなく、侵食や崩壊した状態を表していることに注意し、検討してゆきたい。

#### 註

- 1 番号は平塚市遺跡地図掲載の番号
- 2 真田・北金目遺跡調査会が㈱玉川文化財研究所に調査・報告を委託した調査区。平塚市真田・北金目遺跡調査会 2003 「15D区発見の遺構と遺物」『平塚市真田・北金目遺跡群発掘調査報告書』4 都市基盤整備公団
- 3 調査時の遺構記号番号を示した。本文中の図もこの記号を用いている。
- 4 平塚市教育委員会の大野 悟氏の教示による。
- 5 鈴木 茂 2003 「真田・北金目遺跡群15 E区の花粉化石」 『平塚市真田・北金目遺跡 群発掘調査報告書』 3 (第4分冊) 平塚市 真田・北金目遺跡調査会 都市基盤整備公団
- 6 平塚市博物館 森 慎一氏の教示による。
- 7 秋田かな子 1991 「王子ノ台遺跡西区-1990 年度調査概要-」『東海大学校地内遺跡調査団 報告』 2 東海大学校地内遺跡調査委員会 東海大学校地内遺跡調査団



写真1 上層礫敷き



写真2 上層礫敷き堀り方



土偶出土状態 写真 3

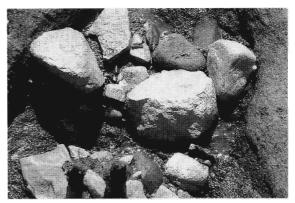


写真 4 礫敷き下土坑

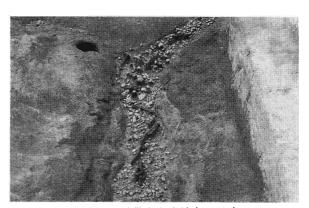


写真 5 礫敷きと土坑(SK1004)



写真6 下層礫敷き

# 川崎市 犬蔵地区遺跡群 元石川一1遺跡

─弥生時代後期朝光寺原式土器出土の小規模な環濠集落を確認─

宮重俊-

所 在 地 川崎市宮前区犬蔵2丁目 1644-1 番地 ほか

調查機関 川崎市犬蔵地区遺跡群発掘調査団

調査担当 宮重俊一

調査目的 土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発

掘調査

調**查期間** 平成 14 年 10 月 28 日~同年 12 月 26 日(第 1 次発掘調査)

平成15年1月7日~同年4月28日(第

2次発掘調査)

平成15年3月1日~同年4月28日(第 3次発掘調査)

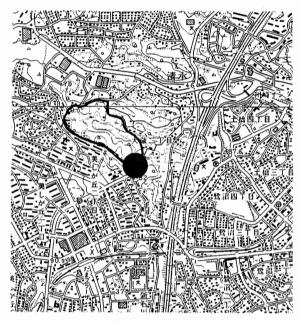
調査面積 4,330 m<sup>2</sup>

# 1. 遺跡の立地

犬蔵地区遺跡群は東急電鉄田園都市線多摩プラ ーザ駅より北東 0.9 km, 東名高速川崎 I. Cより南 西 0.9 kmの川崎市宮前区犬蔵2丁目に所在する。 遺跡群のある同市宮前区付近は多摩丘陵の南部に あたり、 大蔵地区遺跡群は鶴見川水系に属する矢 上川上流部のひとつの犬蔵谷戸と呼ばれる小支谷 によって開析された丘陵地上の尾根付近より谷戸 に面した斜面にある。遺跡群の各遺跡は谷戸の北 側丘陵には西側より蔵敷-9遺跡,蔵敷-6遺跡, 蔵敷-7遺跡, 蔵敷-8遺跡の4遺跡, 南側丘陵 に元石川-1遺跡がある。本遺跡は谷戸に対して やや張り出た半島状の小丘陵の尾根部を中心に東 側の丘陵に入り込んだ小支谷に面した比較的傾斜 の緩やかな南東斜面と西側の埋没谷に面した傾斜 のやや険しい北西斜面とに大別する。遺跡群周辺 には菅生水沢遺跡、菅生カネヅカ遺跡、白井坂埴 輪窯跡、土橋第六天遺跡、大野遺跡などがある。

# 2. 調査経緯

大蔵地区遺跡群の調査は大蔵土地区画整理事業 に伴い実施した。この内蔵敷-6・7・8・9遺



第1図 遺跡位置図(1/25,000)

跡の確認調査は各遺跡ごと平成 12 年9月から平成 14 年3月の期間に随時実施し,蔵敷-6遺跡を除く各遺跡が発掘調査の対象となった。発掘調査は平成 14 年度の 6 月に蔵敷-7遺跡,8月に蔵敷-8遺跡,平成 15 年2月に蔵敷-9遺跡にそれぞれ実施し,縄文時代,古墳時代の遺構・遺物が確認することができた。元石川-1遺跡は第1次確認調査を平成 13 年8月,第2次確認調査は平成 14年 11月,第4次確認調査は平成 15 年 3 月に実施し,これらの成果を基に平成 14 年 10月 28 日~同 12月 26 日に第1次発掘調査、平成 15 年 1月7日~同 4月 28日に第2次発掘調査を同3月1日~同4月 28日に第3次発掘調査を実施した。

# 3. 調査概要

元石川-1遺跡は犬蔵谷戸の南側に立地し、谷戸に対してやや半島状に派出した標高 66.0~75.5mの小丘陵に立地する。確認した遺構は縄文時代と弥生時代である。縄文時代は同前期の住居跡3軒、早・前期の土坑27口、炉穴7口、集石跡

2口などで, 土坑は調査区全般に, 住居跡, 炉穴, 集石跡は尾根から傾斜の緩やかな南東側斜面を中 心に分布する。弥生時代の遺構は同後期の住居跡 9軒と溝跡1条などを確認した。弥生時代後期の 住居跡はYT-5の一部が撹乱によって損われた のを除き比較的良好な状況で遺存する。平面形は 隅丸長方形,長方形,楕円形の3種に分類し,隅 丸長方形を呈するのはYT-1・2・5・8・9 の5軒,長方形YT-3・4の2軒,楕円形はY T-6・7の2軒である。最大の規模を有するの は  $9.70 \times 8.28$  cm深さ  $60 \sim 120$  cmのYT-1で, 9.24×7.42 cm深さ 12~84 cmのYT-4がそれに 続く。最小は 2.91×2.73 cm深さ 22~64 cmのYT - 3 でその他は 5 ~ 8 × ~ 7 m の規模をもつ。柱 跡は明確な主柱穴をもつΥT-1・4・7・8・ 9と小規模な壁の柱穴のYT-3、明確な柱穴の ないYT-2・5・6などに大別できる。炉跡は 各住居跡の床面から確認し、そのいずれもが床面 を浅く掘り窪む地床炉で枕石を置かれたものもあ る。またΥТ-1・4は複数の炉がみられた。ま たΥΤ-1は最初に中型の住居跡から改めて大型 の住居跡に作り替えられていた。溝跡は調査区北 側で削平されているが丘陵尾根と走り、調査区南 西端で曲がり斜面を蛇行しながら下り正面の小支 谷の方へ延びている。確認した長さは99m,幅は 0.60~1.72 cm. 深さは 13~78 cmで断面はV字状 を呈しているが、J-12・13区付近はやや逆台形 に近い。

遺物は弥生時代後期の朝光寺原式土器と東京湾岸系の久ヶ原・弥生町式土器が各住居跡や溝跡から出土し、後期後半のⅢ期(新)(註1)の土器が主体を占めている。最も旧いのはYT-5の壷形土器で後期前半のⅡ期と考えられる。この他に勾玉や紡錘車などの土製品も出土している。

## 4. まとめ

平成 14 年度に発掘調査を実施した川崎市犬蔵地区遺跡群の4遺跡のうち元石川-1遺跡の調査を中心に発表した。遺跡の主体は弥生時代後期の住居跡群を中心とした集落跡である。本遺跡の特徴を要約すると。

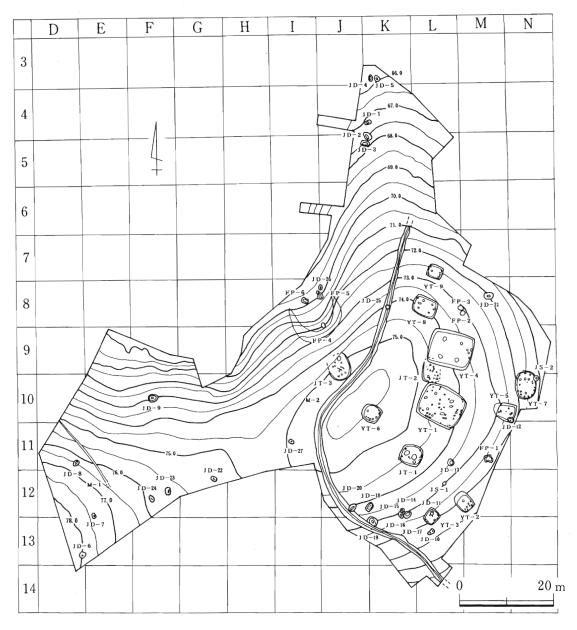
1. 遺跡は鶴見川水系の矢上川上流部にあたる犬蔵谷戸に対して半島状に派生する小丘陵にある。

- 2. 傾斜の緩やかな南東側斜面に立地し、V字状 の溝跡で集落の範囲を画する小規模な環濠集落の 形態をとっていることが認知される。
- 3.9軒の住居跡は長軸9m以上の大型住居と3m以下の小型住居とが混在し、大型住居は集落の 最標高でその中心部分に位置する。
- 4. 同時代後期後半の朝光寺原式土器と東京湾沿 岸系の久ヶ原・弥生町式土器とが同じ遺跡の中で 混在して出土する。
- 5. 川崎・横浜市北部地域の同期における他の遺跡と共通する特徴をもっている。

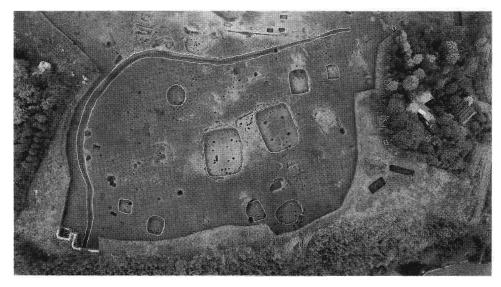
以上が今回の調査で得られた成果であるが、神奈川県内における弥生時代後期の研究は土器の分析や移動を中心に、遺跡の立地、農耕生産など様々な視点から行なわれている。元石川-1遺跡の整理もこれらの研究に耐えうる資料を提供することを目標に報告書の作成を進めていきたい。

## 引用・参考文献

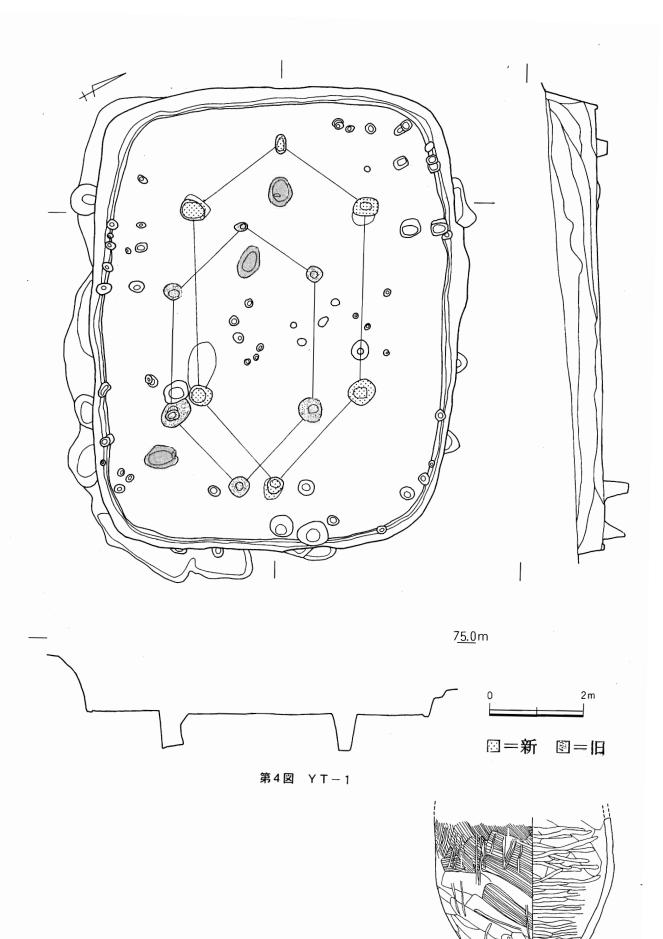
- 1) 『川崎市史 資料編1』 川崎市 1988
- 2)安藤広道 「川崎・横浜市域の弥生時代後期 の社会」 『平成8年度 考古学講座 かな がわの弥生時代の社会』 神奈川県考古学会 1997
- 3) 田村良照 「朝光寺原式の属性(前編)ー観 福寺遺跡群の検討からー 『神奈川考古第34 号』 神奈川考古同人会 1998
- 4) 相川 薫ほか 『川崎市多摩区 長尾台北遺 跡発掘調査報告書』 長尾台北遺跡発掘調査 団 1997
- 5)渡辺 務 横浜市緑区 赤田地区遺跡群 集 落編 I 日本窯業史研究所 1994 渡辺 務 横浜市青葉区 赤田地区遺跡群 集落編 II 日本窯業史研究所 1998
  - 註1 本稿の弥生時代後期の編年観は参考文献2と 5をもとに記した。



第3図 元石川一1遺跡遺構配置図



元石川一1遺跡



出土遺物